

平成21年 3月27日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19530579
 研究課題名（和文） 学習科学の観点から学習過程を質的に明らかにする
 テキスト言説分析の提案
 研究課題名（英文） Textual-Discursive Analysis: A Qualitative Method
 for Articulating Learning Process
 研究代表者
 茂呂 雄二(MORO YUJI)
 筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
 研究者番号：50157939

研究成果の概要：

学習(学び)は、過去の経験と将来の見通しの再編成のプロセスである。このプロセスは様々な言説と談話を通して再構成され、他の人々と共有される。本研究は、この学びのプロセスを支える人々の語りを分析するための分析方法の開発を目指した。語りの事例として、看護師になる過程ならびに教師になる過程を取り上げて、語りの内容と形式をどのように分析すれば良いか、分析におけるポイントを共有化できる方法論を開発し、いくつかの事例を分析した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：テキスト言説分析、学習過程、学習科学、語り、看護、教師養成、情動政治、道徳言説

1. 研究開始当初の背景

現在、学習心理学には「学習科学: Learning Science」と呼ばれる、新しい研究領域が生まれ、従来とは異なる視点から学習過程を吟味している。学習科学は仕事現場の共同学習など、従来見逃されてきた学習状況に着目し、学習概念(学習とは何か)を再構築しつつある。従来の学習概念を学習者の能動的な活動や意味付けを無視した教授偏重主義と批判し、新しい学習環境を作るべきと主張している。

学習科学では、学習を潜在学習、日常学習(学校外学習)、公式学習(学校内学習)に分類している。この分類でいえば、従来の学習研究が、あるいはの記述分析に偏り、の記述分析が手薄であり、それぞれの学習タイプ間の移行が取り上げられていないことが指摘できる。そこで本研究では学校から現場への移行過程を中心に取り上げ、その過程を分析可能な手法を提案することとした。

2. 研究の目的

「学習科学」の一層の充実のためには、学習過程のなかでも“深い学習過程”を記述・評価できる質的分析の方法が必要とされている。そこで、本研究は「テキスト言説分析」と呼ぶ、新しい分析手法を開発することを主目的とする。この手法を看護師および教員養成課程にいる学習者から得たインタビューデータに適用し、学習に関する意味付けの特質を明らかにすること、同時に質問紙法を利用した量的分析によって学習者の意識を定量的に構造化し、両分析の異同を明らかにすることを目標とする。

学習科学をさらに発展、展開するためには、いっそう精度が高く、公共性の高い分析手法の開発の必要性を痛感するに至った。応募代表者の研究室では、主に内容分析、グラウンデッドセオリーアプローチ、相互行為分析を利用してきたが、これらの手法には次の問題点がある： いわば職人技であり修得に時間を要すること、分析過程を手続き化する余地があること、分析の過程と解釈の過程を公共化する必要があること。

以上のような学術的な背景と、応募者のこれまでの研究活動の経緯から、本研究を企画するに至った。

本研究の具体的ねらいは、研究期間内に、分析手法の確立、資料への適用、量的分析との比較、の3点をおこなう。

3. 研究の方法

分析手法のテキスト言説分析とは、学習者の語りデータから、学習プロセスに関する学習者自身のいさぐ言説空間を再現する手法である。一般的にいうと、学習とは今行なうことと過去に行なったこと（既有知識）の連続性と不連続性を打ち立てる作業だといえる。実際に学習者は、現在の学習を過去の学習と関係づけ、これからの展望に関する見通し（パースペクティブ）を構成しつつ学習を進めている（香川・茂呂, 2006）。学習者が見通しを得るということは、現在の学習と過去の学習を対比して、学習に含まれる内容（概念）道具、媒介、人、事物を、遠近、連続・不連続、関与有・関与無といった関係軸上に配置することだと言い換えられる。この配置の全体構図を言説空間と呼び、言説空間を研究者側が構成することで、その学習者の特性、学習者が所属するコミュニティ特性、これらの特性に起因する学習の妨害要因等を理解することが可能になるものと仮説できる。本研究は、この仮説の確かさを確認するとともに、この言説空間の構成手順を確立する。

4. 研究成果

「テキスト言説分析」と呼ぶ、新しい分析手法を開発した。この手法を看護師および教

員養成課程にいる学習者から得たインタビューデータに適用し、学習に関する意味付けの特質を明らかにした。同時に質問紙法を利用した量的分析によって学習者の意識を定量的に構造化し、両分析の異同を明らかにした。この比較作業を通して「テキスト言説分析」の妥当性を確認し、その改善を目指し、「テキスト言説分析」を学習研究者、実践家、実務家の利用に供するための手続き化をはかった。理論的な作業として、質的方法論の位置を学習科学の観点から意味付けた。またテキスト言説分析の手続き化のために、言説分析研究をレビューしたうえで、分析手法を作成した。教師養成領域では、これを道徳および道徳に係る教師の語り実践に適用してみた。また看護領域では、言説に含まれる情動政治のプロセスに着目して、看護学生の語りを言説論から位置づけ直した。

本研究の成果の一部は、Cambridge 大学出版局より 2009 刊行予定の書籍 Learning and Expanding with Activity Theory(査読あり) に週力される等、国際的に見ても高い評価を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計12件)

臼井 東・茂呂雄二 2009 『心理研究の方法としての読書 テキスト言説分析の提案』 筑波大学心理学研究, 37, 19 - 30

茂呂雄二 (2008) 教育心理研究における質的方法の意味 教育心理学年報, 47 集, 149-159.

香川秀太 . (2008(印刷中)) . 「複数の文脈を横断する学習」への活動理論的アプローチ 学習転移論から文脈横断論への変移と差異 心理学評論, 51 巻 4 号, 463-484.

茂呂雄二2008 活動としての認知、情動、言説：活動理論とコミュニケーション (認知言語学会 第 8 回大会 シンポジウム『認知言語学とコミュニケーション』)日本認知言語学会論文集、第 8 巻, 522-531.

城間祥子・茂呂雄二 (2007) 中学校における専門家とのコラボレーションによる和楽器授業の展開過程-「参加としての学習」の観点から - 教育心理学研究 55(1),

12-134.

城間祥子・茂呂雄二 2007 学生能楽サークルにおける仕舞の学習過程・初心者の技能の社会的構成・筑波大学心理学研究, 33, 9-28

朴東燮・茂呂雄二(2007)バフチンの対話性概念による社会心理研究の拡張 実験社会心理学研究, 46(2), 146-161.

香川秀太.(2007). 行為・変化の契機としての学内-学外間のギャップ:看護学生の学習過程の分析から,日本認知科学会「教育環境のデザイン」研究分科会研究報告, 13巻1号, 7-18.

香川秀太・櫻井利江.(2007).学内から臨地実習へのプロセスにおける看護学生の学習の変化:状況論における「移動」の視点から,日本看護研究学会雑誌, 30巻5号, 39-51.

香川秀太.(2008). 状況論とは何か:実践の解明と変革のアプローチ. インターナショナルナーシングレビュー, 31巻5号, 19-26.

香川秀太.(2008). 質的研究と量的研究の共通点と相容れない点 インターナショナルナーシングレビュー, 31巻5号, 34-38.

香川秀太.(2008). 状況論を知るための62冊. インターナショナルナーシングレビュー, 31巻5号, 61-65.

[学会発表](計12件)

Syoko SHIROMA and Yuji MORO
“Analyzing professional Noh performers’ tacit knowledge by a method focused on paired discourses” International Society for Cultural and Activity Research, San Diego, California, September 8-13, 2008 (2008年9月9日)

岩木穰.(2008). 方略に関する知識が創造

的思考に及ぼす影響. 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 2008年10月11日, 東京学芸大学

徳舛克幸(2008)若手小学校教師の経験からの学習 経験と学習の相互構成性 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 2008年10月11日, 東京学芸大学

徳舛克幸(2008)小学校教師の問題状況の詳解と対応方略 日本質的心理学会第5回大会発表論文集, 2008年11月30日, 筑波大学

Shuta Kagawa. (2008). Transfer as discursive practice and affection: Analysis of student nurses’ transitive learning. ISCAR2008, University of California, San Diego(2008年9月10日)

香川秀太.(2008). 学習・発達論の最前線:質的研究はいかに学習・発達を捉えるべきか.日本質的心理学会第5回大会発表論文集, 2008年11月30日, 筑波大学

野村侑加.(2008). 質的心理学会と会話分析の接点を探る 母子相互行為の事例分析を通して .日本質的心理学会第5回大会発表論文集, 2008年11月30日, 筑波大学

守下奈美子.(2008). キャリア発達と職業集団語-初航海の実習生は「シーマンシップ」をどのように捉えるか. 日本質的心理学会第5回大会発表論文集, 2008年11月30日, 筑波大学

臼井 東 2008 社会文化的アプローチからの道徳性研究の提案 日本質的心理学会第5回大会シンポジウム, 2008年11月29日, 筑波大学

香川秀太.(2007). 医療・看護領域における状況論的アプローチの実際. ISCAR-Japan/Asia 第1回大会, 2007年9月6日, 武蔵野工業大学

香川秀太.(2007).活動システムの可視化実践.ISCAR-Japan/Asia 第1回大会,2007年9月6日,武蔵野工業大学

香川秀太.(2007).質的研究と量的研究の二分法の再考:社会文化的アプローチの観点から.日本質的心理学会第4回大会発表論文集,2007年9月30日,奈良女子大学

[図書](計4件)

Shuta Kagawa & Yuji Moro. (2009(in press)). Application of Spinoza's theory to the concept of activity theory: Dynamics of the active and passive during transition in the learning process, A. Sannio, H. Daniels, & K. Gutierrez (Eds.), Learning and Expanding with Activity Theory, Cambridge University Press.

茂呂雄二 社会的なもの:学習研究における質の探求 無藤隆・麻生武編『質的心理学講座』第1巻『育ちと学びの生成』東京大学出版会(2008)pp.105・136.

茂呂雄二(2008)活動の心理学:歴史と未来 田島信元(編)文化心理学 朝倉書店

香川秀太.(2009(印刷中)).異種の時間が交差する発達:発達時間論の新展開へ向けて,サトウタツヤ(編),TEMで始める心理学-時間とプロセスを扱う質的研究を目指して,誠信書房.

6. 研究組織

(1)研究代表者

茂呂 雄二(MORO YUJI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号:50157939

(2)研究分担者

服部 環(HATTORI TAMAKI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号:70198761

(3)連携研究者

なし